

令和元年6月20日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02348

研究課題名(和文) 公民権運動から半世紀、アフリカ系アメリカ文学のパラダイムの行方 世代間の対話

研究課題名(英文) Re-Imagining the Paradigm of African American Literature: Intergenerational Dialogues on Cultural Identity in the Post-Civil Rights Era

研究代表者

西本 あづさ (Nishimoto, Azusa)

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：40316881

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、公民権運動後、エスニック・リバイバルと多文化主義運動の中で構築されたアフリカ系アメリカ文学・文化のパラダイムが、アフリカ系集団内で拡大した多様性や格差、文化戦争、グローバル化や消費文化の浸透等を背景に揺さぶられる状況を、新たな文学・文化、ひいては共同体の構築を模索する創造的プロセスとして読み解いた。

分析の対象としたのは、1970年以降のアフリカ系アメリカ文学・文化を牽引してきたトニ・モリスンの1980～90年代の中期作品と同時代との相互形成関係、モリスン世代と公民権運動後に成長したポスト・ソウル世代の間で交わされた文学・文化のパラダイムの修正と継承をめぐる対話的プロセス、である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

- (1) 現代アフリカ系アメリカ文学およびアメリカ文学を代表する作家トニ・モリスンの1980～90年代の作品を再読し、モリスン文学と同時代との相互形成関係を検証した。さらに、従来評価が低かった第四作Tar Baby (1981)を起点として中期モリスン文学の展開に新しい読みを提示した。
- (2) 日本ではまだ十分知られていないポスト・ソウル世代の作家、アーティスト、研究者を招聘し講演会、研究会を開催するとともに、彼らの作品と思想をモリスン世代と比較する論文や研究発表を世に問い、日本における彼らへの認知度を高めた。
- (3) 1980～90年代の文化事象を21世紀現在の事象につながる動きとして問題提起した。

研究成果の概要(英文)：This project analyzes how the paradigm of African-American literature/culture established during the height of the ethnic revival and multicultural movement in the first two decades of the post-civil rights era, was reimagined under the influence by such contemporary phenomena as the growing increase of socio-economic and cultural diversity among African-American population, the culture wars of the late 1980s and 90s, the impact of globalization, and of consumerism, among other things.

Research was carried out to demonstrate (1) how Toni Morrison's novels in the 80s and 90s responded to the rapidly changing situation, actively participating in cultural formation of the period while at the same time being formed by the time; (2) how the intergenerational dialogues/debates between Morrison's generation and the Post-Soul generation on the paradigm of African American literature/culture contributed to the formation of new literary/cultural expressions and more diverse notions of identity.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：ポスト公民権運動時代 アフリカ系アメリカ文学・文化のパラダイム 多文化主義 トニ・モリスン
ポスト・ソウル 文化的アイデンティティ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究を開始した2015年は、1960年代の公民権運動の成果と言われる公民権法と投票権法の制定からほぼ半世紀の節目に当たった。当時の合衆国では、一方で、2008年のオバマ大統領誕生をきっかけに、アメリカは人種問題を克服し「ポスト・レイシャル」な時代を迎えたとの言説が飛び交い、文学研究においてもシカゴ大学のケネス・W・ウォレン(Kenneth W. Warren)が*What Was African American Literature?*(2011)において、過去の人種差別や人種隔離の体験を共通基盤として構築されてきたアフリカ系アメリカ人のアイデンティティや文学・文化表現のあり方に疑問を投げかけていた。

(2) 他方で、合衆国では、非武装のアフリカ系の人々が殺害される事件が相次いで発覚し、Black Lives Matter運動が起こるなど、人種問題の根深さが再び大きくクローズアップされる中、公民権運動時代を再検討、再評価し、新しい世代が継承する動きも顕著になっていた。

2. 研究の目的

本研究は、上述のような21世紀の状況を読み解くことを将来的な射程に入れつつ、その手がかりを求めて、そこに至るポスト公民権運動時代、とりわけ1980~90年代における、アフリカ系アメリカ文学・文化のパラダイム・シフトの過程を、以下の観点から分析することを目的とした。

(1) 1960年代に最盛期を迎えた公民権運動を経て、エスニック・リバイバルと多文化主義運動を背景に、1980年代までに構築されたアフリカ系アメリカ文学・文化およびそれを扱う研究のパラダイムが、ポスト公民権運動時代に拡大したアフリカ系の集団内部の多様性や格差、1980年代末から90年代に激化した文化戦争、さらにはグローバル化の加速や消費文化の浸透といった事象によって、内外から揺さぶられていく過程を跡づける。

(2) (1)の過程で、世代や立場を異にするアフリカ系の作家やアーティストたちが人種・文化・アイデンティティをめぐる問題にどう応答したかを検証し、そこで展開された世代間の相互批判と交渉を、新たな文学・文化の地平を切り拓き、ひいては新たな共同体の構築を模索する、破壊力と創造性に満ちた対話的プロセスとして読み解く。

3. 研究の方法

(1) 1970年代から現在まで創作活動を続け、1993年にはアフリカ系アメリカ人として初のノーベル文学賞を受賞したトニ・モリスン(Toni Morrison, 1931-)の文学が、その間の時代の変遷にどう応答し、アフリカ系アメリカ文学/文化のパラダイム形成を牽引しつつ、自らも時代によって変化し形成されてきたかを分析した。今回は、とりわけ1980~90年代に発表されたモリスン中期の作品群 *Tar Baby*(1981)、*Beloved*(1987)、*Jazz*(1992)、*Paradise*(1997)を対象とした。調査の対象は、既出版物のみならず、2016年からプリンストン大学で公開が始まった作家のマニュスクリプトにも及んだ。

(2) 公民権法制定後の時代に成長し1980年代末頃から声をあげ始める「ポスト・ソウル」とも呼ばれる世代の作家やアーティストや知識人たちが、人種隔離時代と公民権運動を体験したモリスンら前世代が描いたアフリカ系アメリカ文学/文化のパラダイムにどう応答し、修正を迫りつつ継承していったかを分析した。文献調査のみならず、21世紀の現在では四十代から五十代となり、アフリカ系アメリカ文学・文化を牽引する中心的立場を担っているポスト・ソウル世代の作家、アーティスト、研究者を招聘し、講演会や研究会、あるいは個人的インタビューを行った。

4. 研究成果

(1) トニ・モリスンと時代の相互形成関係をめぐる研究

1970年以降のアフリカ系アメリカ文学を牽引してきたトニ・モリスンの1980~90年代における文学的展開を検証した。ポスト公民権運動時代にアフリカ系アメリカ人が経験した急激な変化や新しい世代の出現を目撃し、民族の文化的アイデンティティの危機を感じた作家が、奴隷制度以来のアフリカ系アメリカ人の歴史と文化の再発見/再構築を通じて、民族の過去と未来を接続する文学世界を創造しようとする模索した過程を跡づけた。また、そうした観点から、従来のモリスン研究では評価されてこなかった第四作 *Tar Baby*(1981)のモリスン文学の展開における重要な位置を論証した。

共訳書、ヴァレリー・スミス著『トニ・モリスン 寓意と想像の文学』(彩流社、2015年)の出版

気鋭のブラック・フェミニスト批評家が出版時における全モリスン作品を論じた *Toni Morrison: Writing the Moral Imagination*(Wiley-Blackwell, 2012)を、木内徹氏と森あおい氏との共訳で出版し、日本に紹介した。

カリフォルニア大学アーバイン校での招待講演

2017年3月3日に同校のアフリカ系アメリカ研究と東アジア言語・文学研究の教員と大学院生を対象に、“Of Futurity, Then and Now: A Re-Reading of Toni Morrison’s *Tar Baby*”と

題する講演を行い、1980年代以来モリスン研究に携わってきた日本人研究者としての立ち位置と問題意識を説明し、日本におけるアフリカ系アメリカ文学の受容について紹介した。さらに、モリスンの第四作 *Tar Baby*(1981)の再評価の必要性について議論し、学术交流を行った。

共著『新たなトニ・モリスン その小説世界を拓く』(金星堂、2017年)の出版「第四章 時間の遠近法とポスト公民権運動時代の神話 『タール・ベイビー』再読」において、従来注目されてこなかったトニ・モリスンの第四作 *Tar Baby*(1981)は、作家がポスト公民権運動時代にアフリカ系アメリカ人が直面する文化的アイデンティティの危機的状況を精査し、後の作品群で探求していく主題を模索したプロセスで執筆された重要な作品であると再評価した。さらに、*Tar Baby*と第七作 *Paradise*(1997)を比較し、両者の間には、黒人民族主義的立場からディアスポラの枠組みへと歴史表象とアイデンティティの枠組みを転換していく跡が見出されることを論証し、多文化主義運動から文化戦争へ向かう1980年代から1993年のノーベル文学賞受賞を経て2000年代に至るモリスンの文学的展開に新たな解釈を提示した。さらに、21世紀的視点から、出版当時の1980年代とは全く違った『タール・ベイビー』の新たな読みと評価が可能であることを論証した。

日本アメリカ文学会東京支部例会での招待研究発表

2018年1月27日慶應義塾大学三田キャンパスにおいて「ポスト公民権運動時代とモリスン文学 『タール・ベイビー』(1981)から愛の三部作への展開」と題する約2時間の研究発表を行った。モリスンの第四作 *Tar Baby*(1981)と公民権運動後から1980年代初頭までの時代背景や文化事象との密接な関連を論証し、同小説に続き「愛の三部作」として構想された第五作 *Beloved*(1987)、第六作 *Jazz*(1992)、第七作 *Paradise*(1997)に至るモリスン文学中期の構想を分析して、さらに2006年にルーブル美術館で開催された *Foreigner's Home* 展にまでつながるモリスン文学の展開に新たな解釈を提示した。

黒人研究学会例会での研究発表

2019年1月26日青山学院大学青山キャンパスにおいて「ジェイディーンと時代 村落文学、*Tar Baby*(1981)と幻の映画脚本、そしてポスト・ソウル」と題する研究発表を行った。ポスト公民権運動時代の新しい黒人女性ジェイディーンの人物造形に、作家と同時代の批評家が共有した民族文化を取り巻く急激な変化への危機感を読み取り、モリスンが民族とその文化をつなぎとめるため構想した「村落文学」について明らかにした。さらに、同小説の草稿とモリスンとトニ・ケイド・バンバーラ(Toni Cade Bambara, 1939-1995)が手掛けた未発表映画脚本のエンディングの分析から、1980年代初めという時代が想定した黒人女性像を探った。最後に、ポスト・ソウル世代とジェイディーンとの呼応関係を指摘し、彼女の物語を当事者として語り出す新しい声の出現を指摘した。

学術論文「『タール・ベイビー』のジェイド・チャイルズを(再)想像する 村落文学、幻の映画脚本、そしてポスト・ソウル世代の声」(黒人研究学会、『黒人研究』88号、2019年)の出版

黒人研究学会例会での研究発表での専門家との質疑応答を踏まえて加筆修正した研究論文を、同学会誌に発表した。本論文は、2016年からプリンストン大学で公開が始まった Toni Morrison Papers のマニュスクリプト調査を踏まえた本格的な研究論文としては日本で初のものである。

2016年秋から継続してきたプリンストン大学での Toni Morrison Papers の調査の成果として、ここまで作家の草稿や未発表マニュスクリプトから多くの発見を得ている。現時点では論文や研究発表として公表できる段階にないものの、今後も調査を継続すればモリスン研究における新たな貢献につながると考えられる。

(2) アフリカ系アメリカ文学/文化のパラダイムをめぐるポスト・ソウル世代とモリスン世代の対話に関する研究

ポスト・ソウル世代の作家、アーティスト、研究者らが、公民権法制定後の時代に成長した経験を踏まえて、モリスンらの世代が描いたアフリカ系アメリカ文学/文化のパラダイムに批判を加え修正しつつ継承してきた過程を検証するとともに、講演会や研究会の開催を通じてポスト・ソウル世代の存在を日本の研究者や学生、一般の人々に紹介した。

トマス・アレン・ハリス(Thomas Allen Harris, 1962-)氏の招聘と講演会、映画上映会の開催

2015年6月、ポスト・ソウル世代の映画監督でマルチメディア・アーティストであるトマス・アレン・ハリス氏を日本に招聘し、23日に所属する青山学院大学、27日に黒人研究学会第61回年次大会(於キャンパスプラザ京都)にて、同氏の講演会と監督映画作品 *Through a Lens Darkly: Black Photographers and the Emergence of a People*(2014)の上映会を企画・開催した。同映画は、2015年全米黒人地位向上協会イメージ賞最優秀ドキュメンタリー賞(劇場映画部門)など世界各国で多くの賞を受けた評価の高い作品であるが、これによって日本の研究者や学生、一般の人々に初めて紹介することができた。なお、映画上映に当たっては、在日アメリカ大使館から受けた Federal Assistance Award from the U.S. Department of State による助成金を使用し、日本映像翻訳アカデミーの協力を得て、同映画の日本語字幕作成し監修を務めた。

ダンジー・セナ(Danzy Senna, 1970-)氏の招聘と講演会、研究会の開催

2016年3月、ポスト・ソウル世代の作家で *Caucasia*(1998)によってスティーヴン・クレイン賞、全米図書協会アレックス賞を受賞したダンジー・セナ氏を、アメリカ大使館から受けた Federal

Assistance Award from the U.S. Department of State の助成金により日本に招聘し、3日にアメリカン・センターJapanにて「歴史が交差する身体を生きる マルチエスニックな作家の心の旅」と題する公開講演会を開催して、約100名の研究者、社会人、学生が混在する多様な聴衆に紹介した。科研費では、4日に青山学院大学においてセナ氏を囲む研究会を開催し、日本のアフリカ系アメリカ文学研究者5名と大学院生らの参加を得て、ポスト・ソウル世代でマルチエスニックな家庭環境で育ったセナ氏の複雑な体験とアイデンティティの感覚について率直な質疑応答と議論を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

西本 あづさ、『タール・ベイビー』のジェイド・チャイルズを(再)想像する 「村落文学」
幻の映画脚本、そしてポスト・ソウル世代の声、黒人研究学会誌、査読あり、『黒人研究』、No.
88、March 2019、pp. 43-52

〔学会発表〕(計2件)

西本 あづさ、ポスト公民権運動時代とモリスン文学 『タール・ベイビー』(1981)から
愛の三部作への展開、招待研究発表、日本アメリカ文学会東京支部例会、2018年1月27日、
慶應義塾大学三田キャンパス

西本 あづさ、ジェイディーオンと時代 村落文学、*Tar Baby*(1981)と幻の映画脚本、
そしてポスト・ソウル、黒人研究学会1月例会、2019年1月26日、青山学院大学青山キャン
パス

〔図書〕(計1件)

西本 あづさ 他、金星堂、新たなるトニ・モリスン その小説世界を拓く、2017年、250
頁

6. 研究組織

研究代表者のみの個人研究

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。